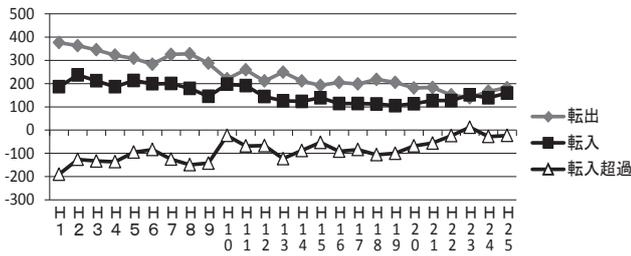


Book 書 評 Review



神山町の年度ごと社会動態（単位：人）



『神山プロジェクト』

篠原匡 著
日経BP社、2014年

町創設以来初めての転入超過

ここでは人口減少に歯止めをかける取組で注目を集めている自治体に関する本を紹介したい。徳島県名西郡神山町（かみやまちょう）は、徳島市内から南西に車で40〜50分の距離にある山あいの町。町域の大半を山林が占め、かつては林業で栄えたが、1955年の町の誕生時に2万人を超えていた人口は減少の一途をたどっており、現在では6千人強、高齢化率は46%となっている。

そんな神山町に今、クリエイターやエンジニアが押し寄せている。アーティストとの交流プログラムやIT企業のサテライトオフィスの開設などによりまちが活性化し、アーティストやクリエイターなど若者層の移住が増加。2011年の社会動態ではついに、町の創設以来初めて、12人という転入超過を記録した。

本書は紙幅の半分近くが神山町への移住者たちの来歴を紹介することに費やされているが、そのプロフィールは多彩である。映像作家、東京のITベンチャーのエンジニア、フランスで修行したカフェのシェフ、放浪の旅を経て山の暮らしに行き着いた歯科医、求職者支援訓練「神山塾」の利用を経て住み着いた

若者たち・・・

「いい加減」がクリエイティブな空気を醸し出す

神山町の何が人を惹き付けているのか。説明しやうい要素としては、抜群のIT環境がある。2003年から徳島県知事を務める飯泉嘉門氏が情報化に力を入れたこともあり、徳島県は県内全域に光ファイバー網が整備されており、動画コンテンツを扱う企業等にとつてのインセンティブになっている。徳島市へのアクセスがさほど悪くない割に生活費が安いのもビジネスパーソンにとつては大きなメリットとなる。こうした条件が「新しい働き方」を模索する時代に合致したということと言える。

しかし、これらは必要条件に過ぎない。クリエイティブ人材を惹き付ける鍵は、神山町が醸し出す「雰囲気」、「空気」であり、その中心となっているのはNPO法人グリーンバレーだと言われる。グリーンバレーは理事長の大南信也氏を始め5人のスタッフが、移住者支援、空き家再生、アーティストの滞在支援など幅広い活動を展開している。国内外のアーティストに滞在して作品を創作してもらおうとするアート・イン・レジデンスプログラムはすでに15年

の歴史があり、18か国から50人の訪問を受け入れた。民間団体が道路の清掃をボランティアで請け負うアドプト・プログラムを日本で初めて導入したのもこのグリーンバレー。「やったらええんちゃう」という阿波弁を合い言葉に、互いに何かを強制することなく、人々の自主性に任せることで、面白い活動がじわじわと広がっていく。サテライトオフィスの開設などにより2013年以降に神山町に20人の雇用を生み出したメディア企業の創業者隅田徹氏によると、全国に地域づくり熱心な人は多かれど、「大南さん（ら3人）のようにふざけながらやっている方はあまりいない」。特定のリーダーが牽引するのではない、いい意味で「いい加減」な空気がクリエイティブな人材にとつての魅力となっているという。

逆指名が生む「創造的過疎」

興味深いのは移住者に対するスタンスである。2007年頃にアーティスト・イン・レジデンスの次の軸を模索していた大南氏らが、アート作品ではなく、一定期間神山町に住み込んで働いてもらう「ワーク・イン・レジデンス」というコンセプトを立ち上げた際に、古民家を貸し出す移住者を選別する「逆指名制度」

を採り、あえて子育て世代や雇用を生み出す起業家を優先するという方針を明確化したのである。将来人口推計に基づき、1クラス20人の子どもを維持するために子ども2人の家族を年間5世帯受け入れるという数値目標を設定し、単なる人口増にとどまらず、世代間バランスのとれた人口構造への変化を意図して創り出す「創造的過疎」を目指している。

こうした発想がサテライトオフィスの誘致へとつながり、一時的な居住者も含めた「住民」たちが、夜ごと隅田氏のオフィスやグリーンバレーの中心メンバーの営む洋品店などの「場」に集まり交流を深めていく中で、いつしか神山町に居を構えるようになる。そして現在では移住者が移住者を呼ぶという好循環が発生している。「そこに何があるかではなく、どんな人が集まるか」。クリエイティブな人材が集まる場を創ることが町としての「生き残りの解」となる。

小さいながらも「クリエイティブ・シテイ」のお手本のような展開を見せる神山町から横浜が学ぶべきものは少なくない。

△編集部▽